

立正佼成会のアメリカ布教

——非日系人布教が展開しているオクラホマ教会の事例——

渡 辺 雅 子

はじめに

立正佼成会（以下、佼成会）は、1938年に庭野日敬（1906～1999、開祖）と長沼妙佼（1888～1957、脇祖）が霊友会から分派して創立した教団で、法華経による双系の先祖供養と心の変革（人格完成）による運命の転換を標榜する新宗教である。佼成会での基本信行は、①供養、②導き・手どり・法座、③法の習学である。

佼成会と諸外国との関係には、WCRP（世界宗教者平和会議）を中心とする宗教協力と海外布教の二本の柱がある。これまで海外布教については、必ずしも積極的とはいえず、日本人・日系人のいる地域においては、現地の日本人・日系人の「世話」が主なものであった。しかしながら、近年、佼成会では海外布教についてのスタンスの変化があった。2003年12月に従来の海外布教課から、教務部国際伝道グループに名称を変更、2006年12月には国際伝道本部となり、2010年12月には教務局国際伝道グループとなった。国際伝道本部となって以降スタッフも増員され、海外への支援体制もしだいに整備されつつあり、海外布教に対して積極的な対応がみられるようになっている。

本稿では佼成会の海外布教地のうち、アメリカを対象とする。アメリカにはハワイ、ロサンゼルス、オクラホマ、サンフランシスコ、ニューヨークに教会があり、そのほかRKNA（北米国際伝道センター、Rissho Kosei-kai



写真1 ダーマセンター（立正佼成会オクラホマ教会提供）

International of North America) がカリフォルニア州アーバイン市にある。アメリカにおける佼成会の会員の多くは日本人・日系人であるが、その中で現地アメリカ人（非日系人）の布教が進展しているところがある。オクラホマ教会（オクラホマ州）とロサンゼルス教会サンアントニオ支部（テキサス州）である。なかでもオクラホマ教会は、2007年12月にロサンゼルス教会のオクラホマ支部から教会に昇格したもので、2009年12月に、初めて非日系アメリカ人の教会長が誕生した。本稿では、オクラホマ教会の事例をとりあげる。

オクラホマ教会の看板には Rissho Kosei Kai Dharma Center と書かれ、一般的にはダーマセンターという呼称を用いている（チャーチという言葉はキリスト教の教会を表すので適切でないで用いていない）。なお、筆者がオクラホマで調査を行ったのは2008年9月である。写真は、写真1（2008年1月撮影）と写真11以外は筆者が現地で撮影したものである。

オクラホマ教会はアメリカの南中部にあるオクラホマ州の州都オクラホマシ



写真2 ダーマセンターの宝前

ティにある。オクラホマ州は、バイブルベルトといわれる聖書主義キリスト教と福音派プロテスタントの信仰が広まっているキリスト教篤信地帯に位置し、プロテスタント、なかでも南部バプテスト、メソジストが多く、政治的には保守的なキリスト教の地帯である。

本稿では、初代教会長のヤスコ・ヒルデブランドとアメリカ人初の教会長になったクリス・ラドソーからの聞き取りから、オクラホマ教会の歴史や現状、そしてヤスコとクリスの生活史や2人が考え工夫しながら進めているアメリカ人布教の実態について考察する⁽¹⁾。

1 オクラホマでの布教の歴史と展開の時期区分

佼成会の信仰のアメリカへの伝播は、戦後アメリカ人と国際結婚し、アメリカに渡った日本人女性によって始まった。オクラホマは日本人・日系人が多く

居住する地域ではないが、佼成会の種がまかれたのは、そこに米軍基地があるからである（日本人会員の多くはアメリカ軍人の妻か元妻である）。オクラホマでの布教は、アメリカ軍人のジョージ・スカットと国際結婚し、1973年にオクラホマシティに移住したキイコ・スカット（1929年生）が中心になって布教を始めた。キイコは20代で佼成会に入会し、東京にある豊田教会で活動をした人である。キイコは日本で本尊を拝受していた。佼成会の会員がオクラホマに1人だけしかいなかった時は佼成会の活動をやっていなかったが、1975年にヨシエ・ポンド（1926年生、夫はアメリカ軍人。東京の三鷹教会で入会）がオクラホマに来ることになり、キイコの自宅を拠点にしてヨシエらと布教を始めた⁽²⁾。ヨシエは、導きの達人で70人くらい導きをしたという。夫が軍属でいろいろな土地を回っていた。

1977年には、のちにオクラホマ教会の初代教会長になるヤスコ・ヒルデブランド（1937年生）がヨシエの導きで入会した。1981年にロサンゼルス教会オクラホマ連絡所が発足、キイコが主任となった。1984年にマチコ（真知子）・ベイブの導きで、アメリカ人リーダーとなり、のちの二代オクラホマ教会長となるクリス・ラドソー（1954年生）が入会し、たまにキイコ宅の法座に行っていた。クリスは1989年に訪日し、東京の英語学校で講師をしながら、武道や指圧を学んだ。1年間の日本での滞在の後、帰国した1990年から佼成会のレギュラーメンバーになり、キイコ宅での会合に定期的に行くようになった。1991年にクリスがキム・ミラー（1951年生）を導いた。このころ、命日に集まる人は12人、式典の時には40～50人程度だった。

1993年に連絡所からオクラホマ支部に昇格、キイコが支部長となった。この時期までの佼成会は日本人が日本語を話し、日本食を食べ、家庭の問題などを語る場であった。キイコは厳しい指導型の法座をした。

1997年から日本人とアメリカ人のサンガ（信仰のグループ）は別々の場所で会合を行うようになり、英語サンガは全米の英語布教を担当していた仲村直己

布教師（1944年生）⁽³⁾を招いて研修を開始した。英語の会合を1カ月に1度、金曜日の19時から合気道道場で行うようになった。その人数は暫時増加し、5～6人から10人、12～15人になったので、クリスとキムは、1998年に日本に団参（団体参拝）に行った際、本部にダーマセンター（道場）設立の願いを提出した。2000年秋に、テキサスにいたヤスコは、仲村布教師からオクラホマに引っ越してほしいと頼まれた。2001年1月にヤスコに支部長の辞令がおりた。ダーマセンターの建物を建てている最中であつた。当時は日本人が多く、アメリカ人はクリスとキムを含め20人程度だつた。7月にダーマセンターの入仏落慶が行われた。この場所はNW（北西）にあり、白人のミドルクラスが住む地域である⁽⁴⁾。現地アメリカ人布教はヤスコとクリスの連携のもと進展していった。2007年12月に支部から教会に昇格、オクラホマ教会初代教会長にヤスコが就任、2008年1月にクリスが有給の本部スタッフ（オクラホマ教会教務員）になった。2009年12月にクリスがアメリカ人初の教会長となった。

なお、ダーマセンターが落成した2001年7月時点の会員数は、日本人26人、アメリカ人27人の計53人だつた。その後日本人会員は26人から30人の間を推移（死亡、会員の転入転出による増減、新しい会員の入会はなし）するが、アメリカ人メンバーは年々着実に増加し、調査時点近くの2008年8月では、日本人29人、アメリカ人146人の計175人と、日本人会員が横ばいなのに対してアメリカ人会員の増加が目立つ。

オクラホマでの布教の歴史は、その展開の様相に着目すると、以下のような時期に分けられる。

I期（1973～1980年） アメリカ人と国際結婚した日本人宅を拠点としての布教。会員の多くはアメリカ軍人と結婚した日本人女性であつた。

II期（1981～1992年） オクラホマ連絡所の設置。日本人中心だが、のちに教会長になるアメリカ人クリス・ラドソーが入会。

III期（1993～2000年） オクラホマ支部に昇格、キイコ・スカットが支部長



写真3 法座でのヤスコとクリス（中央がヤスコ，右がクリス）

となる。日本人とアメリカ人サンガの分離。アメリカ人サンガで英語での研修開始。

Ⅳ期（2001～2007年） 自前の道場（ダーマセンター）の建設。ヤスコ・ヒルデブランドが支部長になる。

Ⅴ期（2008年～） 教会に昇格。ヤスコが教会長になる。クリスが本部職員になり、専従する。日本人は毎月4回の命日への参拝，アメリカ人はサンデーサービスと分離して棲み分け。2009年12月にクリスが教会長就任。初のアメリカ人教会長の誕生。

オクラホマでアメリカ人布教が本格化し、一定程度の成果をおさめることができたのは、ヤスコとクリスの役割が大きい。そこで次節でヤスコの生活史についてみておこう。日本語と英語の双方ができ、アメリカ文化もわかるヤスコの存在によってクリスへと円滑に教会長をゆずることができた。他の日本人会員はアメリカ軍人の妻であったが、ヤスコは留学でアメリカに来た人である。

2 ヤスコの生活史

ヤスコ（靖子）は1937年に東京都墨田区で生まれ、そこで育った。実家は創業80年になる文庫皮という伝統皮革工芸品の製造販売店を営んでいた。中高一貫の私立女子校に入学したが、高校2年の時に結核で1年間休学して療養した。病気療養で万座温泉に行く汽車の車中で、前に座った日本人の年配の女性が隣に座った外国人女性との間に新聞紙で壁をつくったのを見て、怒りと恥ずかしさでいっぱいになった。その人に詫びたいと思っても英語ができず、ただその人に飴をあげただけだった。このことをきっかけにアメリカに留学して英語を学びたいと思うようになった。体が弱いのでダメだという父親を説き伏せ1年間だけの約束で、1964年にカリフォルニアのカトリック系の女子大に留学した。しかし、1年をすぎても自分の思うようには英語が上達せず、学業を継続したいという気持ちになり、寮母をしながら奨学金をもらい、卒業することができた⁽⁵⁾。

ヤスコは、卒業後は帰国するつもりで、日本行きの航空券を買っていたが、イースターの休暇の時期に卒業旅行で行ったラスベガスで、のちに夫となる人と出会った。猛烈なアタックをされ、1968年に結婚した。夫は17歳年上と言っていたが、あとになってわかったことだが、実際は27歳年上だった。大変ハンサムな人で、ベストドレッサーだった。夫は石油を掘り当て、鉱山から金を掘り出してという一獲千金を夢見ていた。金山のあるアリゾナ、コロラド、石油産出地のオクラホマと転々とした。しかし、現実には借金とりに追われる生活だった。また先妻から頻繁に電話がかかってくることもあって、ヤスコの悩みは深かった。暴力もふるわれた。夫に対しては、自分を求めているのではなく、「従順な日本女性」を求めているのではないかと疑問をもっていた。日本では当時は男の人のいうことには、「はい」だった。ヤスコもそうだった。こうし

た従順さを失わせないため、アメリカ人と友達になったらだめと言われた。

1977年に、オクラホマでヨシエ・ボンドと出会い、「私の娘になったらおいしい日本食をいつでも食べさせてあげる」という言葉にひかれて佼成会に入会した。ヨシエは心の温かい、おせっかいなくらい人のことを心配する面倒見がよい人で、導きが上手だった。

ヤスコが入会した当時は、佼成会の会員は50人くらいおり、キイコ宅に彼岸や盆には35人くらい集まった。ヤスコは「なぜなのか」と聞くタイプだったが、キイコやヨシエからは、なかなか納得いく答えが得られなかった。ヤスコの質問にヨシエが手におえず、日本から来た素晴らしい人がいるので、あの人のところで学びなさいと紹介してくれたのが、水谷容子（当時50代）である。1979年のことであった。佼成会の修行を積んでいた水谷は、日本で佼成会の主任の役までしていたが、夫が設計技師であるため、仕事の関係でオクラホマに来ていたのである。この時は離婚したくて、泣いていた時期だった。そこで因縁果報という法門を知り、びっくりして目が覚めた。これまでヤスコは自分が正しく、相手が悪いと思っていた。ヤスコは学びたい、水谷は教えたいで、水谷が夫の仕事の関係でアリゾナに移動するまでの3カ月間、毎日水谷のもとに通った⁽⁶⁾。佼成会の教えを学んで充実した日々だった。佼成会に熱心になるほど夫は不機嫌になった。水谷について勉強しているころ、「別れたい」「別れなさい」という話になり、水谷宅に一泊して帰ったら、夫がいつもとは違って、「自分が変わるし、幸せにするから」という言葉が夫から出た。

水谷がオクラホマを去った後、佼成会の会合に出ても、読経供養のあと法に関係のない話をして食事をするだけだったので、物足りなさを感じ、水谷がくれた『法華三部経』10巻を独学で学んだ。

1984年2月に夫が交通事故死した。夫の死後、働かなくてはならなくなったが、職業経験がないので、思うような職につけず、コーヒーショップやレストランで働いた。コーヒーショップでの働きぶりを見ていた副社長から誘われ、

不動産関係の会社で働くようになった。夜はステーキハウスのキッチンで働いた。働いている間は佼成会の活動はできなかったが、開祖庭野日敬の6つの誓い⁽⁷⁾を自分の誓いとして実践した。『佼成』、『躍進』などの佼成会の機関誌、本は一生懸命読んだ。庭野日敬の本は全部読んだ。辛い時はその自叙伝を読んだ。

そうしているうちに、テキサスに住んでいる佼成会の先輩会員から、病気がちの妻を看取った人がいるので、これならヤスコにもよいだろうということで、ハロルド・ヒルデブランド（2歳年上）に引き合わされ、1994年5月に結婚した。ハロルドは空軍で会計を担当していた。結婚の時に、夫には仏教徒であることを認めてくれないと結婚できないと言い、それは問題ないと認めてもらった。結婚してからテキサスに移動した。よき夫に恵まれ幸せな毎日であった。「ハリーは良い人だ。こういう役（支部長、教会長）をすることがわかって、仏様がこのような人をくれたのだと思う」とヤスコは述べている。

1997年に、佼成会の全米布教キャラバン隊⁽⁸⁾がテキサスにいたヤスコのもとにも訪れ、英語布教が行われていることを知った。「英語布教をやりたいなあ、けれどもオクラホマを離れた自分はお呼びではないだろうな」と思っていた。2000年秋に仲村直己布教師から「オクラホマに帰って来てくれないか」と言われた。夫はテキサスに35年も住んでいるのでよいとは言わないだろうと思ったが、「聞いてみてよ」という言葉に後押しされ、聞いてみたら、「あなたは行きたいのか」と尋ねられた。「ここの生活はとても幸せだが、今日の私の幸せは開祖さまの教えがなかったならばない。開祖さまの教えに報恩感謝したい」と言ったところ、「オクラホマには誰も知っている人がいないが、あなたがいるなら充分だ」と夫が言い、オクラホマに転居することになった。

2001年1月に、ロサンゼルス教会の八木谷育子教会長から支部長の「お役」をもらった。当時、キイコ支部長は夫が脳血栓で倒れたため、介護で手いっぱいだった。（しかし、このことについてキイコは大変不満だったようである⁽⁹⁾。

英語布教のことも視野に入れ、ヤスコを支部長にと心づもりしていたと思われる)。当時は日本人会員が多く、アメリカ人で熱心なのはクリスとキムだけだった。オクラホマに戻って来た時、ヤスコは「佼成会を本^{もと}として世界万国に法華経が広まる」という神示を思いだし、アメリカに布教する時が来たのだと思ったという。

ヤスコは英語が大変できる人で、オクラホマの他の日本人会員は、いわばたたきあげの英語であるのに対し、ヤスコの英語はきちんと学んだ英語である。また、日本人のエスニック・チャーチとしてではなく英語布教、アメリカ人布教に取り組みたいと願っている。ヤスコは2007年12月にオクラホマ支部が教会に昇格したのに伴い、初代教会長となった。

教会になってから、日本人会員は日本に準じて命日（1日朔日参り、4日開祖命日、10日脇祖命日、15日釈迦牟尼仏命日）に集まり、アメリカ人（英語）は日曜日のサンデーサービスと棲み分けるようになった⁽¹⁰⁾。日本人会員は、教えへの関心というより異郷にある寂しさから日本語を話したり、持ち寄った日本食を食べたりするエスニック・コミュニティとしての役割を求めているようだ。ある日本人会員が言うように、「みな寂しいから日本人と接したいので、宗教にかかわっている。教えの勉強をしようとする人もいない」のである⁽¹¹⁾。他方、アメリカ人は教えに関心がある。ヤスコは教会長になった時、「アメリカ人を中心にアメリカにご法を広めるのが私の希望です。みなさん（日本人会員）は支えの方に回っていただきたい」と頼んだ。これについては日本人会員からの反発をかった⁽¹²⁾。キヨコはこの時から全く教会に来なくなった。

アメリカ文化がわかり、英語の能力が高いヤスコと日本文化に関心を持ち、日本語はわからないが、日本人の心がわかり、佼成会に対して情熱をもつクリス、両者は話し合いながら、佼成会のアメリカ人布教に取り組んできた。

それでは、次にクリスに目を転じて、彼女がどのようにして佼成会に入会し、信仰を深めていったのかについて概観しよう。

3 クリスの生活史

クリスは、1954年にオクラホマ州で生まれ、高校時代までオクラホマシティ近郊の小さな町で育ち、オクラホマ大学入学とともにオクラホマシティに転居した。大学では音楽を専攻した。大学を卒業し12年間石油会社で働き、バイオリン奏者としても活動していた。また、1972年から武道（神道夢想流杖術、合気道、柔道）を習い始め、それをきっかけに日本文化に興味をもつようになった。禅も実践したことがある。

クリスは、マチコ・ベイブ（1941年生）の導きである。マチコは1963年、22歳の時に日本で15歳年上のアメリカ軍人と結婚（7年後離婚、のち再婚）し、1968年に渡米した。1976年ころ、マチコはキイコに誘われ、佼成会に入会した。再婚した夫がやっていた額縁の店にキイコが来て、「古いであなたのことを教えてくれる人が来るので来ない？ おいしい食べ物もあるから」と誘われたのである。

クリスが入会したのは1984年のことである。マチコはクリスと会った時にことについて次のように述べている。「レストランに夫と一緒に日本食を食べに行った。そこにクリスが来ていたので、日本食が好きな？と声をかけた。クリスは墨絵の額縁をつくりたいと言ったので、額縁屋だった自分の店を紹介した。クリスは額縁を自分のところの店でつくり、安くしてくれたとチップをくれた。ちょうどクリスの母が亡くなって悲しんでいた時だったので、クリスに母の供養をしないといけないと言った⁽¹³⁾」。

当時、アメリカ人は1人だけ、お経は日本語、法座も日本語、たまに何をしているか英語で囁いてくれる人がいたくらいだったが、日本の伝統文化に関心があったので、日本文化、日本食で居心地がよかったという。クリスによると「ここをやめないほうがよいという心の声があった。今から思うと深層意識の

中でそういていたのではないか。このようになるとわかっていたのではないか」と述べる。しかし、当時は佼成会にはたまに行くくらいで、活動にはそれほど積極的でなかった。

クリスは、1989年に訪日し、英語学校で英会話を教えながら、1年間日本で武道（合気道、柔道、杖術）や指圧を学んだ。日本では佼成会に出入りはしなかったが、1990年に帰国してから、佼成会の会合に定期的に参加するようになった。1990年時点ではキイコ宅に大体12人くらいが集まり、式典の時の参加者は40～50人くらいだった。しかし、だんだん参加者数は減少していった。転居によってオクラホマを離れる人がいたこともあったが、その理由の一つとして挙げられるのはキイコが大変強い人で、マネジメントスタイルが厳しく強かったことにもよる。しかし、キイコのよい点は責任をもってやろうとしていたことだったとクリスは述べている。

1991年にクリスがキム・ミラー（1951年生）を導き、次第に英語サンガが発展してきた。キイコに聞いても質問には答えてくれないので、翻訳のある *Buddhism for Today: A Modern Interpretation of the Threefold Lotus Sutra*（庭野日敬著『法華経の新しい解釈』の英訳、佼成出版社刊）や *The Threefold Lotus Sutra*（法華三部経の英語による抄訳。佼成出版社刊）で勉強を始めた。1997年から日米サンガは別々の場所で集まるようになり、英語サンガは仲村布教師を呼んで研修を開始し、教えに対する理解も深まっていった⁽¹⁴⁾。また、ロサンゼルスで行われる英語リーダー教育にも参加した。英語サンガへの参加者が次第に多くなってきたので、日本に団参で行った時にクリスとキムは道場建設を本部に頼んだ。1999年に土地を探し、本部の支援のもとに2001年にダーマセンターが開所した。

クリスは自由業でマッサージをして生計をたてていたが、だんだんと佼成会のほうに重きを置き始め、客を断っても佼成会のことをするようになった。そのようにしていれば、お金が入らなくなる。ふつうの仕事だったら、9～17

時までには拘束される。しかし、クリスは佼成会のことをやりたい。そこでヤスコは、本部に「この人をなんとか佼成会で雇ってほしい。決して雇って損をする人ではない」と説得した。学林（佼成会の全寮制の幹部養成機関）を出ていないので本部はしぶった。クリスはスタッフ（教務員）として採用される前、2005年9月22日から11月21日まで2カ月間本部で勉強した。この学習はとても充実していたものだったようである。法華三部経10巻はまだ出版されていないが、英語版がすでにできていた。クリス1人のためだけの教育だった。クリスは「仏教は武道と似ている。武道は肉体を鍛えることでスピリット（魂）を鍛える。仏教はスピリットを鍛える。スピリチュアリティには子どものころから関心があった」と言う。クリスは2008年1月からスタッフとして採用された。その採用の条件は、オクラホマ教会を助けること、英語のカリキュラムを発展させること、日本で英語の翻訳が必要な時は助けることであった。クリスは2009年12月にヤスコのあとをついで教会長になった。はじめてのアメリカ人教会長であった。

4 ヤスコとクリスのアメリカ人布教への取り組み

(1) ヤスコとクリスのペア布教

ヤスコは、「日本人がアメリカ人に布教するには限界がある。同じ言葉を話し、同じ文化をもつアメリカ人が布教をするのが一番。喜んで法華経を広めたいというアメリカ人信者が不可欠だ」と思った。「クリスと出会えたことは幸運だった。クリスなしにはいられない。クリスと二人三脚で相談してやってきた。二人ともアメリカで入会した。二人で話し合い、やってみてダメなら、またその時考えようという風にやってきた」と言う。クリスはヤスコについて次のように述べる。「ヤスコは演歌ではなく、ジャズが好き。オープンで、新しい考え方や方法に進歩的な考えをもつ人だ。アメリカはヨコ型の社会だが、

それに適応していた。日本式ではなく、自分が提案したことに対してもダメと言わない。教会長が遠隔地にいて近くにいないので、いろいろと試すことができた」のである。ロサンゼルス教会オクラホマ支部時代は、仲村布教師は1カ月に1回来たが、教会長は年に4回来る程度だった。

ヤスコは、「崇拜対象は久遠実成釈迦牟尼世尊、経典は法華三部経、教えは開祖さま、会長先生に基づく」という三点は変えられないが、あとはアメリカにあったやり方でよいという考えをもっている。登り方は違うかもしれないが、信じてほしいとやってきた。この三つはのがしてはいけませんが、たとえば宝前のやり方などは応用なので土地にあったものでよいと言う。

ヤスコはアメリカの大学に留学した人で、アメリカの文化を知的に理解できる人であり、かつアメリカで入会したため、日本のやり方に固執しない。アメリカの日本人社会にいた人でもない。クリスや他のアメリカ人会員との間も英語で十分コミュニケーションができる。そしてアメリカにふさわしいやり方を模索していき、クリスの言うことやアメリカ人の言うことを頭ごなしに否定するのではなく、まずは受ける。クリスが言うように、ヤスコは二つの文化を知っており、言語能力があることがメリットだった。クリスは武道の心得もあり、日本文化に関心を持ち、広い心で物事を受容する人だった⁽¹⁵⁾。この両者の組み合わせはアメリカ人布教にあたってよく機能した。

(2) アメリカ的展開

アメリカ人のダーマセンター訪問のきっかけ

ダーマセンターに来るのは、友人から聞いて、看板を見て、他の教団の人が言っていたので、Webサイトを見てといった理由である。Webサイトはとても重要だという。尋ねてきた場合、話をすることは大切で、それによって、その人の教育レベルや何を求めているか知ることができる。クリスは根本仏教のことなどを2時間は話す。

メンバーの属性

メンバーの年齢層は50～60代中心である。30代、40代もいるが、小さい子どもがいる年代は多くない。中心の年代は青年時代に学生運動が盛んだった世代で、オールドヒッピーズともいえる、東洋思想に関心をもち、精神的なものに目が行く時代に青春時代を送った人が中心であるように見受けられた。これはアメリカ人メンバーの中心であるクリスの年代とも関係するだろう。オクラホマ教会のメンバーは白人の中産階級、高学歴、50～60代など、似通った階層が多い⁽¹⁶⁾。

アメリカ人が求めているもの

佼成会に来るアメリカ人は、真理の探究をしている人、キリスト教の教会を離れ、スピリチュアルのほうに行った人のうち、仏教に関心のある人である。アメリカ人メンバーから聞き取りをすると、組織宗教を好まず、スピリチュアリティに関心があるということは皆が口をそろえて言うことだ。そして、宗教遍歴をしている人も多かった。スピリチュアルな探求をして、佼成会にたどりついた人がほとんどで、何か問題をかかえていて助けてほしいということではない⁽¹⁷⁾。キリスト教会からは排除されがちな同性愛者も佼成会のメンバーである。また競争社会のアメリカであるが、内省的で、アグレッシブではなくおとなしいタイプの人もいた。

ダーマセンターの魅力は、そのオープンで誰でも歓迎する雰囲気、ポジティブな雰囲気、心地よい雰囲気であるという。初めから入会を勧めず、しばらくしてコンフォタブルになったらメンバーに誘う。プレッシャーはかけない。アメリカはI（アイ＝私）で始まる個人主義だが、佼成会の教えは「まず人さま」という調和の教えである。この考えに導くために、さまざまな工夫をしている。日本人は先祖供養などの行から入るが、アメリカ人は仏教の学びから入る。

サンデーサービスとメディテーション

アメリカ人はメディテーションが好きである。「アメリカでは人々は物質主



写真4 サンデーサービスでの読経供養
(アメリカ人メンバーの導師・協導師)



写真5 サンデーサービスでの読経供養



写真6 サンデーサービスでの
コーヒーブレイク



写真7 サンデーサービスでの
本尊拝受予定者のダーマトーク

義の方向に行っている。そこでスピリチュアルなバランスをとることが重要になる。忙しいので静かになるということがない。それでメディテーションの意味があるのではないかとクリスは述べる。

アメリカ人メンバーのサンデーサービスは毎週日曜日10時から12時まで行われる。読経供養(約40分)のあとメディテーション(15分間。照明が暗くなり、太鼓の音の余韻。椅子にすわったまま目をつぶり、瞑想をする。鉦の音が鳴り、照明が明るくなっていく)、題目三唱、会員綱領を斉唱する。そして5分間のブレイクがあり、コーヒーなどの飲み物、菓子などをつまむ。それからが法座

である⁽¹⁸⁾。みな丸くなって座り、体験や気づきを話すとともに、本尊拝受予定者がいる場合は、ダーマトーク（仏教講義）も行われる。

ダーマセンターでは火曜日の17時30分から20時30分まで、他団体のメディテーションに場所を貸している。音楽は使わない。メディテーションを教える先生が来る。佼成会でもサンデーサービスの一部としてではなく、メディテーションを始めた（月曜日の夜、外でメディテーションをやることをアナウンスしていた）。当時は音楽などをどうするか考慮中の段階であった。

自発性喚起と新しい取り組み

2008年にクリスが専従のスタッフになってから儀式のトレーニングを始めた。また、男性メンバー（1948年生）の発案でスピリチュアルな映画を見るムービーナイトを開始した。スピリチュアリティに関心がある人が多いので、方便で映画など興味をもちやすいところから入らせるのもよい案だと思ったからだ⁽¹⁹⁾。そして、サンデーサービスや式典の導師、木鉦（協導師）、カネ（協導師）、太鼓、音楽などの担当者は当番制ではなく、自発的に自分がやりたい場合は用紙に名前を記入する。

また、アメリカならではの参加型、主体性喚起の工夫がある。本尊拝受予定者は、他のメンバーにダーマトークをする。これに対して、他のメンバーは自分はこう思うと発言し、フランクな形で意見交換する。ヤスコヤクリスは時々方向付けをする。怒りの心とは何かを考えさせ、もっと思いやりをもつと人生はもっとたやすくなること、人を裁かない（批判しない）こと、仏性礼拝にむすびつけていく。日本はタテ型社会だが、アメリカはヨコ型の社会である。「ああせい、こうせい」という指示型はそぐわない。だからこそ彼らの自発性を重視するやり方をとるのである。

クリスは法華経の研修を行っているが、根本義（根本仏教）の研修は毎週1回メンバーが講師になって行われる。このように、オクラホマでは上下のタテ型ではなく、メンバーが自発的に参加するような形で運営されている。またメ

立正校成会のアメリカ布教



写真8 儀式のトレーニング・木鉦の練習

Risho Kosei Kai of Oklahoma
Dharma Center

Volunteers for Leading Service
Month of September 2008

Date	Doshi (Leader)	Kane (Bell)	Mokusho (Block)	Taiko (Drum)	Music (Play/Change CDs)	Reader
9/7	Kris	Curtis	Kim	Kathy	IRA	Joan
9/14	Kim	Donna			Janis	
9/21		Kim	Donna	IRA		
9/28		Kim	Curtis			

写真9 当番希望者の記入用紙（導師，木鉦，カネ，太鼓，音楽，拝読）

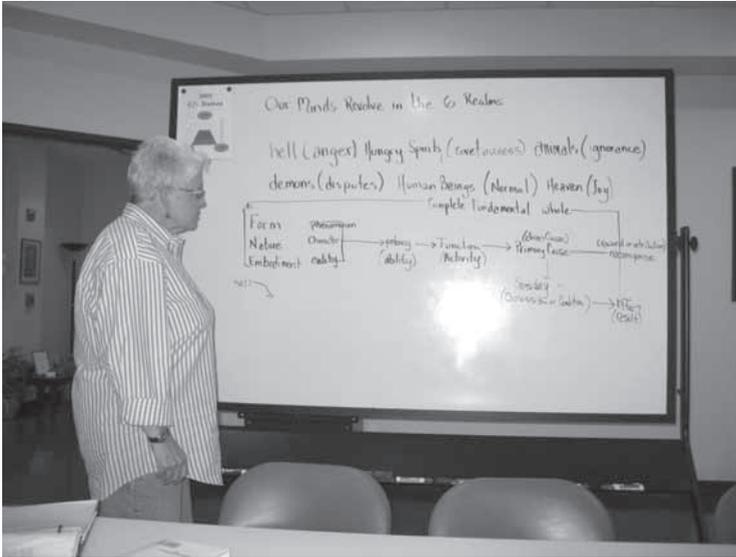


写真10 メンバーが講師になり根本義の研修

メンバーによる仏教の講義やプレゼンテーションが可能なのは、オクラホマのメンバーの知的水準が高いこと、仏教に対する関心があることと関連していると思われる。

次に日本的な、文化的に異質性がある佼成会の教えや実践をどのように説明しているのか、ヤスコとクリスへの聞き取りからみていきたい。

(3) 佼成会の教え、実践の説明

佼成会の宝前（仏壇）にある本尊、そのわきに掲げられている庭野日敬・長沼妙俊の写真、おたすきといったものは見た目からいってもアメリカ文化とは異質である。また、佼成会の基本実践である先祖供養にかかわる総戒名、先祖供養それ自体、そして布施、南無妙法蓮華經の題目と經典、法華經の教え、手どり、法座というアメリカ文化にはないものをいかに説明しているかみていこう。

本尊

本尊はブロンズ色の立像である（日本のものとは色が異なる）。一般的には仏教寺院では坐像が多いので本尊についてはアメリカ人から聞かれる。キリスト教プロテスタントでは偶像崇拜はだめである。なぜ仏が立っているのかということは、強調して説明する。すべての人を幸せにしてあげたい。そのためには座ったり寝たりしてはいられない。だから立像であると説明する。すなわち、菩薩行のための Buddha in action（行動する仏陀）と説明する。

庭野日敬（開祖）・長沼妙俊（脇祖）の写真

写真については、質問があってもおかしくないが、まだ誰からも問われてはいない。経典読誦のあとに、Founder Niwano, thank you（開祖さま、ありがとうございます）という言葉を入れている。アジアでは teacher に対する尊敬はあるが、アメリカは新しい国なので、そういう感覚はあまりない。

おたすき

佼成会では供養をする時や儀式儀礼の時には、おたすきをかける。アメリカではたすきをかけるのは美人コンテストだけだ。そのため、おたすきを理解させることは難しい。そこで、おたすきは僧の服装のモダンな表現で、これをつけたらスピリチュアルなマインドになると説明する。

総戒名

佼成会の重要な実践として先祖供養がある。そのために必要なのが夫方妻方の先祖を祀る総戒名である。日本では入会の要件として、総戒名を祀りこむが、アメリカではそれは難しい。宝前（仏壇）を自宅につくるかどうかは、やりたいと言うまで待っている。アメリカ人の場合、仏教の中心は仏陀である。日本式の総戒名よりも新しい額装本尊（中心に佼成会の大聖堂の釈迦像の写真がある。左側に総戒名と宅地因縁、右側に開祖庭野日敬と脇祖長沼妙俊の法号）のほうが受け入れやすい。なお、左上の総戒名には両家の Family の名前を記入する。

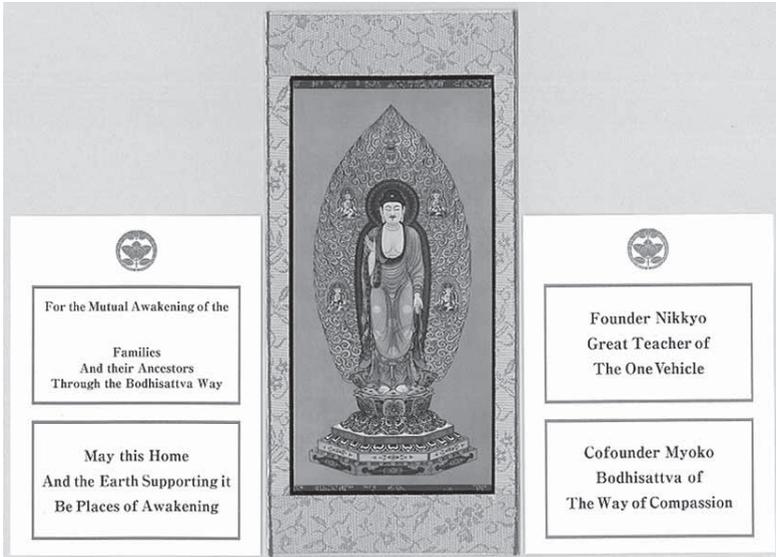


写真11 額装本尊英語版（立正佼成会提供）

先祖供養

先祖供養の訳として、崇拜（worship）と訳すのは不適切である。この言葉を使えるのは神に対してだけだ。先祖に対する感謝（appreciation）と言えば彼らの心に入る。先祖供養については life appreciation service という。アメリカは歴史があまりなく、個人主義の国で、家庭はうまくいっていない場合が多い。ここに自分がいるのは、うしろに祖父母がいる。回向のためにお経をあげてよいことをする。彼らによりエネルギーを与える（give good energy）。回向は家族に対する利益（benefit specially family）であり、スピリチュアルなエネルギーを先祖に送る（sending spiritual energy）と説明する。よいエネルギーは家族の問題を浄めると説く。日本人なら先祖供養はわかるが、アメリカではわからない。メンバーの中には親に虐待された人もいる。カルマの説明もするが、アメリカ人はエネルギーを重んじるので、それよりもよいエネルギーという説明をする⁽²⁰⁾。お経は仏陀の教えであり、よいエネルギーを与えるた

めのものであるから、回向することによって利益 (benefit) を受けると言う。少数ではあるが先祖供養をよく実践しているメンバーも中にはいる。

布施

布施 (donation) は、考え方による。お金による布施ではなくても運営資金獲得のためにバザーを開いたり、できることで協力するやり方もあるので、布施のかたちは一概には言えない。アメリカ人なりのやり方もある。一番大切なのはどういう心で布施をするのかということだ。金持ちの人は寄付をするが、たとえば建物に自分の名前をつけている。貧者の一灯が大切である。インテンション (意図) が大切だ。布施の強要はしないが、教えを実践する中で布施の意義を伝える。

題目と経典

南無妙法蓮華経の題目について、南無は respect, 妙法 mystery of universe, 蓮華 lotus, 経 sutra と訳す。仏教に知識のある人用, ない人用にいくつかの違う説明がある。題目は日本語読みをするが、経典は英訳されている。新経典は以前の経典よりわかりやすくなっているが、We trust Budda (私はブッダに帰依します) というところは説明が必要である。経典についてもアメリカ人は一つ一つの言葉に納得しないと読まないの、用語一つにも正確さ、的確さが必要である。

法華経の教え

「法華経の教えを習ったら、必ずいつも心して、それを実践することで日常生活の中でどういう風に出てくるか見る習慣をつけなさい」と言っている。どういう心をもっていると、どういう結果が出たかわかる (因縁果報) と、だんだんよいことをしてくる。そうすると菩薩行をする。感謝の念も多くなる。強制的に何をしなさいとは言わない。繰り返し教えを伝え、心がけて自分に起ってくることを見つめる習慣ができる。そういう時にこうしたらよいと言う。

手どり

「手どり」という言葉（日本語読みそのまま）も使うが、encounter という言葉のほうがよい。心と心のエンカウンター（出会い）、スピリチュアル・エンカウンターという言い方をする。

法座

法座については、sacred circle（聖なるサークル）と言ったり、circle of compassion（慈悲・思いやりのサークル）と言ったりする。法座といってもダーマセンターでの法座だけでなく、コーヒーショップでも法座、夕食をしながらでも法座、2人だけでも法座、法をあてはめていく場であれば法座ととらえる。しかし、アメリカ人の法座は日本のような法座ではない。日本では法座には法座主がいて、話を聞き、「結び」をする。アメリカではいろいろな人に意見を言わせ、それを教えて結論づけることが必要だ。アメリカ人は法座主（ファシリテーター）が言うことを黙って聞くということではなく、自分が体験していたら、みな自分の体験を話す。話をやめさせることは難しい。アメリカ人は「あせい、こうせい」と指示するのは嫌う。ほめる必要がある。日本でのように「あなたが悪い」とは言わない⁽²¹⁾。アメリカではポジティブな言葉をはじめにかける。アメリカ人は独立的であり、エゴイスティック（自己本位）である。来て間もない人にはポジティブなフレーズから入ったほうがよい。きついことを言うと逃げてしまう（強く言うと防御的になる）。自分を変えることを法華経の教えから導く。「結び」のことはダーマ・ガイダンスという。

アメリカ人は、ダーマセンターは大変安全な場所（very safe place）で、よいポジティブなエネルギー（good positive energy）に満ちているという。アメリカ人は人前では自分の個人的問題を出したがる傾向がある。しかし、小集団の中で、そこが安全な場所と思えば、6～8人ならば個人的問題も話す。リーダーがオープン・ハートならば話す。小さなグループになると、問題を言いやすい。最初は大法座がありますといっても出てこない。アメリカ人が心を

立正佼成会のアメリカ布教



写真12 法座 (左からデイブ, ヤスコ, クリス, キム)
(後ろにあるのは宝前。中央に本尊。左の写真は開祖庭野日敬, 右の写真は脇祖長沼妙俊)



写真13 サンデーサービスの法座で題目三唱するメンバー

開くには時間がかかる。法座とサンガのメリットは、集まって大法座になると、そこにいる人はそれを聞いて学ぶことができることであると言う。

法座では問題がある人はエネルギーがとまっている。希望を与えたり、昔風なら強く言ったり、人に応じてどちらのやり方でもよいが、一般的にはアメリカ人には前者の方が受け入れやすい。

クリスは日本の本部で法座の研修を受けたが、それを応用する。クリスは武道を習ってるので、東洋風を西洋風に変えるのには慣れている。

ダーマセンターでの法座は、日本人の場合、1、4、10、15日の命日のあと、アメリカ人はサンデーサービスのあとにやる。命日が日曜に重なる時は日米合同でやる。

(4) アメリカ人氣質と自己変革

アメリカ人の特徴として、すべて自分のアイディアだと思いたいので、そういうふうに仕向けて行く。ダーマセンターに来た人には初めから宝前をもてとか、おたすきをかけるとは言わない。学んで、自発的にやりたいと言うまで待つ。「しなくてはいけない、してください」とは言わずに待つ。これは日米の文化の違いである。

アメリカ人メンバーは、以前は自分のことだけに関心があったが、今はみなと一つになるという気持ちや感謝の気持ちが強くなっているという。人生そのもの、現在の自分の境遇、仏陀という元に感謝するようになった。また、みな一緒に法を実践できるダーマセンターに感謝する。学ぶことを最初に経験して、次第に感謝を経験することで深くなった。根本仏教だけでなく、法華経も勉強すればするほど、自分の生活にあてはめて解決していける。根本仏教（たとえば四諦の法門など）はトラブルが起きた時に、問題解決のために有効であるという。

なお、メンバーの聞き取りからは、佼成会に入って、怒らなくなった、穏や

かになった、人を裁かなくなった、批判しなくなったということが口ぐちに聞かれた。

おわりに

オクラホマでは組織宗教を嫌い、スピリチュアリティに関心のあるアメリカ人が佼成会に集っていた。内面を見つめようとする人々だった。タテ型組織の日本のやり方で上からの押し付けや指導ではなく、ヨコ型組織に慣れている彼らの自発性を喚起し、彼らの案を取り入れ、現地の文化や彼らの気質に合った工夫をしつつ、根源的なところでは外れた方向にいかないようチェックしながら、参加型の運営が行われていた。オクラホマでは、クリスという熱意があり、日本文化にも共感をもっている人材と、ヤスコという英語力があり、アメリカの文化をよく理解している人材を得たということで、現地アメリカ人布教が展開してきた。

日本人会員の場合、新たな導きがあるわけではなく、また子ども世代への信仰継承が全くなされていらないので、あと10年もすれば日本人会員自体が消滅していくことが予測される。こうした中で、佼成会の現地化も含めたアメリカ人布教の試金石としてのオクラホマ教会の役割は大きい。しかしながら、オクラホマ教会も課題を抱えている。それは教会のアメリカ人メンバーがかなり同質的な属性をもっていることである。50～60代が多く、20代の青年が入ってこない。小さな子どもが少ない。また人種的には白人で高学歴の者が多い。佼成会がアメリカ社会に定着していくためには、会員層の多様化も含め、いくつかの課題を解決していかなければならないと思われる。

また、佼成会の基本信行とされる、①供養、②導き・手どり・法座、③法の習学のうち、オクラホマのアメリカ人メンバーについては、法の習学、仏教の知的理解が目立っている。しかし、なかには先祖供養を真剣に実践するものも

出始めている。

なお、本稿では、オクラホマ教会（ダーマセンター）の中心的な役割をしめるヤスコとクリスの言説を中心とし、アメリカ人会員からの聞き取り調査、日本人会員からの聞き取り調査の結果についてはほとんど言及することができなかった。アメリカ人の信仰受容の諸相については稿をあらためたい。

注

- (1) オクラホマ教会の調査研究については、服部喜美枝「ロサンゼルス教会オクラホマ支部の事例から導きだせる米国布教発展の鍵——聞き取り調査を通して——」（立正佼成会学林本科卒業研究論文）2004年、白石恭子「アメリカ立正佼成会のあゆみとこれから——ロサンゼルス教会オクラホマ支部の3年間の取り組みとその変容——」（同）2008年がある。

前者の服部論文に関しては、調査研究の仕方やまとめ方について相談にのった。服部論文はすぐれた事例研究で、教会実習としてオクラホマ教会で3カ月滞在し、詳細な報告を行っている。後者の白石論文は、服部が調査を行った2004年と白石の調査した2007年の3年間の変化を追っている。論述にあたっては、筆者が2008年9月に実施した調査および上記の論文を参考にしている。クリスが教会長になって以降の展開はあるが、本稿では調査時点までの記述とする。

- (2) キイコとヨシエの関係はよくなかった。キイコがヨシエを嫌ったとのことである。
- (3) 仲村直己は、1944年に生まれ、家族とともに1959年に渡米した。アメリカでは小柄な体を生かして競馬の騎手になった（その後調教師になる）。母の仲村和子は渡米と同時に設立されたロサンゼルス支部長に任命され、その後1969年に教会への昇格とともに教会長になった（自宅を教会道場として開放）。1977年に自前の教会道場が建設された時、和子は教会長をしりぞき、日本から派遣された林総太郎にその役をゆずった（ロサンゼルス教会史に関しては「第三節 ロサンゼルス・サンフランシスコ教会史」、教団史編纂委員会編『立正佼成会史』第6巻、1985年、773—783頁を参照）。

直己は競馬の騎手をやめて調教師になってから、佼成会では主任の役をしていたが（佼成会では教会長—支部長—主任というライン）、1987年7月から1995年11月までロサンゼルス教会長に就任、その後、全米の布教師となり、英語布教を担当した。テキサス州サンアントニオに居住した。後述する1997年に行われた全米布教キャラバンの英語布教の担当者である。仲村は2009年12月に定年のため退任した。なお、仲村によるとアメリカ永住の日本人でアメリカ人布教をやっているのは仲村とヤスコしかいないという。

立正校成会のアメリカ布教

- (4) ダーマセンターはオクラホマ市 NW (北西) にあり、I 40 という主要ハイウェイが近くに通っていて、交通の便がよい。ダーマセンターの周囲は住宅地である。キイコは自宅のある SE (南西) の地域を主張した。しかし、クリスとキムはあまりよいところでない場所 (アメリカでは居住地域によって階層が異なる) に道場があってもよい人は来ないということで、白人のミドルクラスが住む高級住宅地である NW (北西) に土地を探した。
- (5) ヤスコの生活史については、聞き取りとともに、ヤスコが校成会の大聖堂で行った体験説法 (「大聖堂での体験説法から 真理は国を超えて」『俊成新聞』2007年12月16日・23日付) も参照した。
- (6) ヤスコは、そのころメソジストのバイブルクラスに週一度行っていた。水谷を連れていくと、水谷は人の顔を見て、あの人を連れてきてと言う。3人のアメリカ人を校成会に導いたが、キイコ宅に行っても、うるさいので通訳をしたらダメと言われた。この人たちは去ってしまった。
- ヤスコは「だから私はクリスが不思議なんです」という。クリスは言葉が分からなくてもキイコ宅のご供養、法座に参加していたからである。
- (7) 開祖庭野日敬の6つの誓いとは以下のとおりである。①これからは決して嘘はつくまい。②力いっぱい働こう。③他人のいやがることを進んでやろう。④他人と争わぬこと。どんなひどい目にあっても、神仏のおぼしめしと違って辛抱すること。⑤仕事をするときは、人が見ていようとまいと、陰日向なく働くこと。⑥どんなつまらぬ仕事でも、引き受けた以上は最善を尽くすこと。
- (8) 包括地域が広く充分な手どり、導きが難しいという課題に対応して、各教会の連絡所や会員宅の訪問を目的に、1997年に全米教会長会議で全米布教キャラバンの実施が提案された。キャラバンは5月にニューヨーク教会を出発、18日間の行程で、アメリカ東部の10州、13都市連絡所や会員宅を訪問した。サンフランシスコ隊は、7月末から8月にかけて10日間で7つの拠点、ハワイ隊は9月に17日間かけて包括地域の拠点をまわり、ロサンゼルス隊は10月末から11月の12日間で11拠点を訪れた。キャラバン隊には各教会の教会長、仲村直己布教師、青年部員、本部海外布教課員らがチームを組み、ワゴン車で移動した。各拠点のリーダーも交代で加わった。訪問先では法華経の研修会や法座等が開かれた。仲村布教師は英語で「ダーマセミナー」を行って教えを伝えた。(キャラバン隊については、『俊成新聞』1997年1月24日付、4月25日付、5月8日付、7月9日付、8月22日付、11月14日付を参照した。)

『俊成新聞』11月24日付には「ルポ 全米布教キャラバン ロサンゼルス隊に同行して」という特集記事が載っている。「ロサンゼルス隊は、八木谷育子教会長ほか、仲村直己布教師、そして前日まで全米英語研修会に参加していたモーガン夫妻とクリ

ス・ラドソーさんらが同行した。…6州11カ所、会員宅にホームステイしながら、車と飛行機で16日間3900マイル（6200キロ）を移動する。…仲村布教師が英語で「四諦の法門」「三宝印」の研修を行ったあと、フリートーキング、…別室では八木谷教会長を中心に日本語で法座が行われていた。…今回のキャラバン布教の目的は拠点での英語セミナーを開くことのほかに、距離的経済的な問題で教会に参拝できない人、長年アメリカで暮らし、アメリカ人の夫と死別または離婚した日本人女性たちを個人的に訪問することにも重点がおかれていた。…仲村布教師は英語の布教を担当し、『英語で法を説くことのできる人材なくしてアメリカに布教はできない』と強く感じている。]

- (9) 日本人会員によると、キイコの夫が脳溢血でその介護があるので、ヤスコが支部長になることになったが、八木谷ロサンゼルス教会長、仲村布教師の前で、キイコは「誰が決めたんですか。あんたのことを殺したいよ」と言ったという。キイコは役の位を落とされたので、ヤスコに反発している。筆者がオクラホマを訪問した時にもヤスコの何回もの説得にもかかわらず、会ってもらうことはできなかった。2008年にヤスコが教会長になってからは全く来なくなった。キイコは英語でのアメリカ人布教には関心はなかったという。

キイコ以外にもヤスコが支部長になって反発する人もいた。ヤスコによると、「あんなんか認めない。わざと結んでください、とやってくる人もいた。私は昔的な結びはいやだ。ある時、違う結びをしたら、それが好きな人もいた。それから聞いてくれる人ができた」とのことである。なお、2008年9月現在の日本人会員数は29人。しかし、出てくるのは4～5人で、このうち13人は遠隔地の人である。仕事があつてこれられないという人には佼成会の新聞、機関誌を送っている。

- (10) 2008年9月に訪問した時は、干渉し合わず、棲み分けている様子であった。日本人とアメリカ人が一緒になるとトラブルになることがあり、それは維持か発展かということにかかわっているとヤスコとクリスはみている。すなわち、一般的な傾向として、日本人は佼成会の日本的スタイルを守ろうとし、アメリカ人は広くアメリカ社会にむけて発展させたいという気持ちがある。
- (11) 日本人会員の場合、全くと言ってよいほど、子どもに信仰継承はされていない。
- (12) ヤスコは他の日本人会員とは、雰囲気も違う。日本人会員からは「今はそうではないが、以前は大学出を鼻にかけていたので好きではなかった。冷たい感じだった」という話を聞いた。
- (13) マチコはクリスを評して、「クリスは男っぽい。サラサラしている。友人が困っていたら何カ月も黙ってお金を払ってあげるような人。クリスはこうしなさい、あしなさいと言うと言うことを聞く。クリスは人の心をつかむ。愛情、思いやり、損得を考えない。ボランティア精神をもっている」と語る。

- (14) 仲村布教師は1997年からサンアントニオに住み、月に1回、火曜日ダラス、水曜日テキサス、木曜日と金曜日オクラホマ（木曜日は日本語サンガ、金曜日は英語サンガ）と回って研修を行った。
- (15) クリスは日本人会員に対しても尊重し、やわらかな態度をとっている。
- (16) 2008年8～9月に佼成会のオクラホマ教会とサンアントニオ支部を調査に訪れたが、これらの拠点でアメリカ人布教が拡大しているといっても、その属性において、違いが顕著である。オクラホマは高学歴の白人中産階級、50～60代が中心であり、かなり同質的な属性をもつ人が集まっていたが、サンアントニオでは、ヒスパニック、白人、黒人、アジア系など様々な年齢層の人々が集まっていた。サンアントニオはメキシコと国境を接しており、ヒスパニックが多く、キリスト教の中でもカトリックの信仰も強い。オクラホマは仏教の知的理解を求める傾向にあるが、サンアントニオでは法座の中でも具体的な問題が出ていた。したがって、非日系アメリカ人であるといっても地域差があり、現地で要求されているものも異なっているように見受けられた。
- (17) しかしながら聞き取り調査を個別に行うと、生育歴における親からの虐待の体験やパートナーとの問題などを抱えている人もいた。
- (18) 筆者が参加した2008年9月7日のサンデーサービスでの法座では、題目の三唱、筆者の紹介、メンバーによる尺八の披露、ヤスコから月曜日に外でメディテーションをやることを知らせ、いずれ自分たちのメディテーションをつくりたい旨が述べられた。クリスからオクラホマはネイティブ・アメリカンの地域で、彼らにも sacred circle があるということが語られた。その後、本尊拝受予定者からダーマトークとして *Buddhism for Today* の12因縁に関する講義がレジュメを配布して行われた。それに対して質疑応答をし、クリスがカルマから脱することについて追加説明をした。ヤスコやキムによる話もあった。また、メンバーからベトナム寺院で、スピリチュアルな組織による平和のためのメディテーションがあるので、その参加が呼びかけられた。そして、次の式典後の会食はケーキにするかポットラック（一品持ち寄り）にするかを尋ね、ポットラックにしたいということになった。
- (19) 筆者が見学した2008年9月5日（金）19時から21時まで行われたムービーナイトでは、Spiritual Cinema Circle Selected Films という既存のものをつかい、二つの短編映画をみて、その内容についてディスカッションを行っていた。センターで行われるものにはヤスコとクリスも出席し、指示的ではない形で方向づけをしていた。
- (20) 服部喜美枝による2004年の調査では、先祖供養をカルマから説明していたとある（服部前掲論文14頁）。また、当時のクリスによる研修のレジュメには、先祖供養を以下のように説明していると言及している。「先祖がいなければ今自分たちは存在しない。家系を木で例えると、葉や花を支えている根の部分が先祖である。その根に栄養を送

ることが先祖供養だ。先祖供養により命の流れを浄化する。それは例えて言うなら、汚れた家の中を掃除するようなもの。先祖が積んだ宿業は子孫に受け継がれていくため、何代かの家系にわたって同じような問題が繰り返されていけば、それは先祖が助けを請うているサインかもしれない。しかし供養によって悪いカルマ（業）を消すことができ、その結果、自分や子孫にもよい影響を与える。また、先祖供養は現在をいかに生きていくか、ということでもある。現在どう生きるかで来世に与える影響が変わる」。 (クリスのレクチャーより)

白石は、先祖供養の習慣のないアメリカで、2004年にはカルマという観点から先祖供養を説明していたが、2007年には先祖への感謝を通して自らの心を整えていくことにポイントが置かれていると述べている（白石前掲論文20頁）。

- (21) 法座ファシリテーション・トレーニング（法華経の勉強、批判をどのように受容するのか。サポートの仕方）については、アメリカではテクニカルな研修はない。佼成会では法座の結びの仕方でも主要なものとして、松原利予方式と川本欣央方式がある。法座ファシリテーターの視点から見ると、エネルギーは恐れや疑惑で止まるので、アメリカでは松原方式の仏性礼拝型の方があっていると思われるが、川本方式（四諦の法門を活用したもっと「痛い」指導）でもかまわない。両方が必要だとヤスコは述べている。自分たちのカラーだが、開祖—松原—光祥（次期会長）風にしたいと言う。ヤスコは信者のことで悩んでいた時（日本人会員のことのような）、松原に指導を受けたことがある。法座で大切なことは、問題解決以前に希望を持たせることであり、各自の仏性を拝んでいるので、優しい言葉が出てくるのではないかと述べている。

付記

本稿は、2008～2009年の中央学術研究所からの研究助成「日本の宗教教団における国際布教の研究」による研究成果の一部である。

立正佼成会オクラホマ教会（ダーマセンター）のヤスコ・ヒルデブランド教会長（当時）、クリス・ラドソー教務員（当時。現教会長）には大変お世話になった。また、アメリカ人メンバーの方々、日本人会員の方々には長時間にわたる聞き取り調査に応じてくださったことに感謝申し上げます。